

卷頭言——WEB版木簡データベースの公開に思う——

木簡学会の設立、発展の背景の一つには、木簡についての情報の公開と共有、共通研究基盤の確保という研究者の願望があった。それは、時として、文献史研究者の我儘と見られたこともある。『木簡研究』が、大半を「前年度出土の木簡」とし、調査担当者のご協力を得て可能な限りの出土木簡情報を集約するという構成をとるのは、本誌の使命の一つが学術情報誌であることの証である。このようなスタイルを考え出された設立関係者の情報化社会到来予知には、情報享受者として感謝をしなければならない。小生も、東京大学史料編纂所で史料の調査・研究・編纂を行う仕事柄、研究機関による情報の集成・公開には日頃より注意を払ってきた。一八八五年より本格化した全国史料調査の成果を史料集編纂に利用する一方、それらを学界共有財産として情報化することは我々の近年の課題であった。一九八四年、パーソナルコンピュータ一台を前にして始められた史料編纂所の歴史情報研究・歴史情報公開も、一步先を進まれていた奈良国立文化財研究所の情報化対応に学びつつのものであつた。奈文研は、初め国立民族学博物館の汎用機をホストにしてデータベースを構築され、ついで自前の汎用機による研究所 LAN で木簡データベースを公開され全国から接続が可能になつた。さらに、奈文研は木簡データベースを学術情報センターへ移植し、利用環境の飛躍的改善を図られた。一方、インターネットによる情報公開の波は瞬く間に広がり、一九九六年に奈文研は WEB サイトからの情報提供を始められ、ついに一九九九年五月から WEB 版木簡データベースの提供を開始されたのである。面倒な認証システム、利用申請と更新手続から自由になり、使い勝手は飛躍的に増大した。

私事ながら、この十月に刊行された日本史の辞典の最後の内容点検の段階で役立つたのは、史料編纂所 SHIPS for Internet での用語検索、学術情報センター NACSIS WEB-CAT での文献検索であり、奈文研 WEB 版木簡データベースであつた。

例えば、屯の解説文を確認するのに、綿一屯の重さが四両であることは、「屯」で検索して神龜四年の豊前国調綿荷札に「四両屯」とあり、すぐに確認できた。もつとも、それは『平城宮木簡』一収録の二八五号木簡であつたが（五〇頁、一一九頁）。九月末からは全国遺跡データベース（二二二万件）も公開されている。「木簡」で検索すると五六遺跡がヒットした。一つの提案——遺跡解説と一体の木簡情報を特徴とする『木簡研究』の誌面画像と木簡・全国遺跡データベースとのリンクは張れないのか。監事の身として会誌販売収入減を提案するのは憚られるが。データに研究論文や解説をリンクしたいと考えるのは横着の故か。

また思い出すのは、史料編纂所で私が属する研究室の室長であつた故彌永貞三先生の木簡研究である。第二回木簡研究集会への報告の準備で、中国簡牘と比較した日本簡の形制の特徴を検出するために、先生は黙々と木簡の寸法を調べグラフを作っていた。私は、なるほど数学的環境だな、などと思っていた。木簡データベースで長さ一尺の木簡を探すには、フィールド検索／寸法で、例えば「297」ミリを指定すればよい。だが、データベース中約二万五千点の木簡の寸法を統計処理するためにはどうしたらよいのか。数字も含めた文字列検索が可能になつた次に、群としての木簡をどのようにデータベースを使い分析できるのか、これが課題となろう。もう一つの提案——木簡データベースを使っての研究コンテストの開催。この豊かな内容のデータベースの使いこなし方の腕を、コンピュータ駆使型研究者諸氏に見せていただきることはできないか。あるいは、木簡学会の研究発表で、そのようなものがあつてもよい。大量データの駆使となると、現在のデータベース形式で対応できるのか、データベースソフト・表計算ソフトで使えるような粗データが学術用に利用可能なのかなど、奈文研の木簡データベースの開発担当者・メンテナンス当事者の過去・現在のご苦労（私も史料編纂所での経験で十分にわかっているが）に感謝した上で、敢えてうかがいたくなるのは、これまた研究者の我儘であろうか。

（石上英一）